

鈴木忠志

シンデレラ、と王子様。

「貧乏な娘が王子様に見初められて結婚する。この格差社会で、そんな話はどうなんだろう。そもそも何を持って素晴らしい王子といえるのか。王子様イコール精神的な目標としてそのあたりの設定が難しいと思っています。」

静岡での成果。そのインパクト。

今回のインタビューのため、SCOTの本拠地、富山県の利賀村に氏を訪ねた。初雪の舞う利賀山房は、演劇人にとつての「聖地」と呼ぶにふさわしい、静謐なオーラを纏っていた。ふるさと静岡から距離を置き、利賀中心の活動に戻った世界的演出家だが、来年五月、音楽劇でグランシップの舞台に帰ってくることとなった。それが『シンデレラ』。しかも親子のための作品だ。まだ、制作の入口に立ったばかりだという氏にその構想などを聞いた。

——十三年間務められた静岡県舞台芸術センター（SPAC）の芸術総監督を二〇〇七年に退任されましたが、その後、静岡にはよくいらっしゃるのですか。二〇一〇年に

はSCOTとして楳円堂で『エレクトラ』、静岡芸術劇場で『リア王4カ国語版』を上演なさっています。

「一〇年の未まで有度山の芸術公園のほうで(有度サロン)を開いていましたから、静岡の様子は折にふれて見えましたよ。観客動員は大変そうだなとか、逆に頑張ってるなどかね。(有度サロン)では、政治家や建築家、文化人と議論したり、私は芝居を上演したり。3年間やりました。」

——芸術総監督に就任当初、“文化振興とは精神のベンチャービジネスである”とおっしゃっていたことが強く印象に残っています。振り返って、静岡におけるビジネスの成果はいかがでしたでしょうか。

「私の実感としては、もの凄くインパクトがあったと思うんですよ。ただし、それは県内ではなく、県外でね。だって、あの当時、ロシアの大臣やら大統領やらがシズオカ、シズオカといって、予算を付けてポリシヨイのスター達を送り込んできた。そんなこと、普通はないですよ。東京の大プロデューサーを通すならともかく、地方の一財団が外国の政府を相手に交渉して、一流の芸術家を招聘するなんてことはなかなかない。そういう意味で県外の人たちは、静岡に驚き、注目したんですよ。さらに静岡での成果は私自身にも及んでいて、先日、エディンバラの芸術総監督から手紙が来たんです。(ロンドン・オリピック)に各国の文化大臣がみんな集まるからサミットを開きたいと。ついではその際、芝居の上演とスピーチを頼みたいというわけ。

こういうことも静岡の十年間で知れ渡ったことが大きいんです。たまたま私がリーダーだったから、私のもとにこういう声が届くわけだけど、それを支えたのは静岡の考えであり、静岡の財力であり、静岡に集まった優秀な人たちなんです。言うまでもなく、集団芸術というのは私一人ではなく、集団の結束力が大事なんです。でも、ヨーロッパなどの前例から見てもそうなんだけど、普通は行政と芸術家は対立する。それが静岡では少ない方だったと思う。だから(シアター・オリピック)スみたいなものがやれた。それは驚くべきことで、静岡県民が思っている以上にインパクトはあったし、宣伝効果はあったということは実感しています。」

——二〇〇九年の十二月、グランシップ開館十周年の記念事業で、SPACと文化財団の初の共同制作作品としてオペラ『椿姫』を手がけられましたか。

「オペラならではのいい体験をさせてもらいました。ミラノのスカラ座をはじめ、オペラ演出の依頼はたくさんあるけど、オペラみたいなものはやっぱり傍に理解をしてくれている人がいないと大変なんだよね。指揮者との関係、歌手との関係、劇場を支えている人との関係。そういう人間関係がきちんとできていないとできないものだから。今、いい加減な演出がいっぱいあって、新作と言っても、こんなこといつでもできる、というものばかり。規模の小さなところでインチキをやっているんだな。アイデアだけポンと出して、コチヨコチヨとやってくる。だから、演出が浮く。ちやっちなんだ

よね。きちんとコンセプトやプロデューサーを立てて、演出を考えて、この歌手、この指揮者で…と、そういう準備が大抵できていない。その点、『椿姫』では、田村さん(グランシップ館長)が音楽に通じた人だったからよかつたんだよ。もちろんもつと時間をかければ…というはあるさ。芸術だからね。でも、あの中ホールの規模で、それほどのお金もかけずによくやったと思いますよ。」



2010年12月、グランシップ開館十周年事業としてSPACと文化財団の初の共同制作作品、オペラ『椿姫』を上演。会場となる中ホール・大地とその裏手にあたる静岡芸術劇場とを隔てる扉が開館十年目にして初めて開いた。

本当は子どもが苦手。

——今回は静岡と富山の初コラボで、しかも音楽劇を手がけられるということですが、題材に『シンデレラ』を選ばれたのは鈴木さんご自身ですか。

「それは私が言ったんだけどね。グランシップは以前、ロッシーニのオペラ『チェネレントラ(シンデレラ)』を呼んでるけど、今回は児童

劇でしょう。実を言うと、私は子どもが苦手なんだよ。子どもとキャッチボールをしたこともないんだから。昔、外国から帰って、子どもの顔を見に東京に一晚泊まったとき、子どもに“おじさん、また遊びに来てね”と言われてシヨックだったんだよ(笑)。それ以来、子どもの目なんてまっすぐに見れない。そういう人生だったからね。ただ、自分は子どもだなあと認識はあるんだよ。いつまでたってもガキ崩れだなあと。でも、実際の子どもはうるさくてしょうがない。やさしくしないといけないし、こまっしゃくれているしね。これまでも学長の依頼がいくつもあったけど、みんな断るわけ。だって、わかるでしょう？ 思わず過激なことを言っちゃうから。親にいろいろ言われるだろうから、そういうものには近づかないことにしていたんだよ。でもね、田村さんがまだNHKにいた頃、突如静岡に訪ねてきて、私を応援してくれたんだよ。だから、やらないわけにはいかないよね。そういうところは義理堅いんだよ(笑)。」

——シンデレラ・コンプレックス、シンデレラストーリーなど、この物語から派生した語もたくさんありますが、鈴木さんは『シンデレラ』をどのようにとらえていらつしやいますか。

「私にも子ども時代はあったから、『母を訪ねて三千里』も、『グリム童話集』も、読んでいるんですよ。子ども話というのは面白けれど、インチキ臭い話ばかりだから、インチキ臭くしないようにしなきゃいけない。貧乏な娘が王子様に見初められて結婚する。この格差社会でそんな話はどうなんだろ



【すぎただし】

演出家。1966年別役実、斉藤郁子、薦森皓祐らとともに劇団SCOT(Suzuki Company of Toga/旧 早稲田小劇場)を創立。76年富山県利賀村に本拠地を移し、合掌造りの民家を劇場に改造して活動。82年より世界演劇祭「利賀フェスティバル」を毎年開催のほか、国際的に活躍。俳優訓練法スズキ・トレーニング・メソッドはモスクワ芸術座やニューヨークのジュリアード音楽院など世界中で学ばれている。74年岩波ホール芸術監督、88年水戸芸術館芸術総監督を経て、95年に静岡県舞台芸術センター(SPAC)芸術総監督に就任(2007年退任)。日中韓三カ国共同の演劇祭であるBeSeTo演劇祭の創設者であり、演劇人の国際組織シアター・オリムピックスの委員の一人でもある。舞台芸術財団演劇人会議初代理事長。演出作品に「リア王」「ディオニュソス」「シラノ・ベルジュラック」「エレクトラ」「流行歌劇カチカチ山」「サド侯爵夫人(第2幕)」「イワーノフ」「劇的なものをめぐってⅡ」ほか多数。著書に「内角の和」、「劇的言語」、「劇的なものをめぐって」、「騙りの地平」、「越境する力」、「演劇とは何か」、「演出家の発想」、「内角の和Ⅱ」、「Culture is the Body 文化は身体にある」など。ケンブリッジ大学刊行「20世紀を主導した演出家・劇作家21人」に、アジア人としてただ1人選ばれ、「The Theatre of Suzuki Tadashi」として出版されている。1939年静岡県清水市(現静岡市清水区)生まれ。

東京から富山県利賀村に拠点を移したのは35年前。「当時は、連合赤軍や新興宗教とか、そんな風に使われたけど、無理もないよね。こんな山の中に40~50人の若者が集まったら確かに怪しげだよ。」今は違う。SCOTは日本を代表する現代劇団として活躍。また、利賀村は世界の舞台芸術家が集まる地となった。

う。問題は王子様なんです。王子様が登場して、めでたし、めでたしなんだから。こんな素晴らしい人に出会えましたと。じゃあ、そもそも何をもって素晴らしい王子といえるのか、だよ。金持ちの男で、東京大学法学部を出て、外資系に勤めていて、親は優しい：そんな男を追い求めている女なんて、芸術家から見れば想像力もないし、バカだよ。王子様イコール精神的な目標として、そのあたりをどこに持つていくかが難しいと思ってるんです。」

——音楽についての構想はすでにおありですか。

「難しいと言いつつ、いろいろ考えていて、それでシャンソンがいいかなあと。詩的でありながら、庶民的なところもあるからね。ロッシーニのオペラを使うと、テンポが結構速いから、稽古にかなり時間が必要だし。フランス・シャンソンを小編成で演奏したら、ちよつと面白くなりそうなんだよね。」

——グランシップでは、子ども向けといえども、子どもだましではない、上質な作品の鑑賞機会を提供しようとはじめての劇場というコンセプトを打ち出していますが、海外での公演の折などに、子ども向けの演劇をご覧になることはありますか。

「いやあ、よく見ましたよ。アメリカのミネアポリスにチルドレンズシアターという子ども向けの劇場があつて、そこには子どものための芝居の蓄積があつてね。『不思議の国のアリス』などは、やっていいと言われて台本ももらっているんだけど。つまり興味がないわけ

じゃない。が、さつきも言ったように自分の子どもとはすれ違つちやつてるものだからね。だから、逆に子どもを主人公にして、大人の悪い側面を出すというアプローチもあるかなとも思っているんです。オペラ版にも悪い姉妹が出てくるでしょう。両親のほうになるほどなど思ってもらえる方向もいいかもしれない。何しろ今は親が悪いんだから。子どもを叱らないし、責任を取れないしね。先日、今度教えに行く中国の大学から先生が来てね。私の訓練を見て何を言うかと思つたら、中国の学生がこの厳しさに耐えられるかわからないというわけ。どうしてかという

と、一人っ子政策で、まして国立の芸大だから金持ちの子ばかり。甘やかされているんだよ。中国ですらそうなんだからね。今回もやる以上は楽しいものにしたけれど、それだけ

じゃなくて、精神的なことを言いたいなど思っているんです。王子様というより、未知の素晴らしいものに憧れて、もつと自分を成長させるものに出会いたいという、うまい構図ができればいいんだけど。現段階では、未知の島国があつて、シンデレラが冒険に出かけていくという話にしようかなと。まわりのみんなは夜になったら帰ってくるんだよ、と言っただけ……まあ、どうなるかね。やってみないとわからない。今の少年少女に、こういう気持ちを持つといいよ、人生を積極的に考えて生きていきなさいと励ましを与えられるような、親には子どもものそういう気持ちを前に押し出してあげられるような、そういうものをやりたいなと思ってるんです。」

「G

親子で楽しむパフォーマンス・アーツ 音楽劇「シンデレラ」

静岡公演 静岡芸術劇場

5/4(金・祝)・5(土・祝)・6(日)

富山公演 富山県民会館 大ホール 5/13(日)

沖縄公演 沖縄市民会館 大ホール 7月下旬

演出：鈴木忠志

制作：劇団SCOT、(財)静岡県舞台芸術センター
(財)静岡県文化財団、(財)富山県文化振興財団
沖縄市経済文化部文化観光課

※詳細は2月頃発表予定

